

平成 30 年度 学内研究助成金 研究報告書

研究種目	<input checked="" type="checkbox"/> 奨励研究助成金	<input type="checkbox"/> 研究成果刊行助成金
	<input type="checkbox"/> 21 世紀研究開発奨励金 (共同研究助成金)	<input type="checkbox"/> 21 世紀教育開発奨励金 (教育推進研究助成金)
研究課題名	がん治療による外見変化の社会生活に与える影響の実態調査	
研究者所属・氏名	研究代表者： 酒井 瞳 共同研究者：	

1. 研究目的・内容

がん治療はがん患者の外見を変え、心理社会的影響を起こしうる。本研究は、信頼性・妥当性が検証された尺度である **Derriford Appearance Scale 59 (DAS59)** を用いて、日本のがん患者における外観上の懸念に関連する苦痛と困難を定量的に評価することを目的とした。

2. 研究経過及び成果

【研究結果】

方法：近畿大学病院腫瘍内科・心療内科の外来または入院にて、化学療法、分子標的療法、または免疫療法の既往歴のある癌患者を対象に、**DAS59** を用いたアンケート調査を実施した。

結果：回答者は 114 人で、平均年齢 62.9 歳。70.2%が女性、86.0%が転移性または局所進行性の切除不能癌であった。78.1%が外見について何らかの気になるところがあると回答した。**DAS59** フルスケールスコアは 77.7 ± 36.4 (range16-170) であった。若年および女性の参加者は、単変量解析においてより高いフルスケールスコアを有し (両方とも $p < 0.05$)、多変量解析においては、若年の参加者がより高いスコアを有することが見出された ($p < 0.05$)。

結論：**DAS59** スコアの分布は広く、外観の変化による心理的苦痛は個人差が大きいことが示唆された。若年および女性患者は高い **DAS59** フルスケールスコアを有する傾向があったが、高齢および男性患者でも高スコアの人もいた。外観の変化に関する基本情報は、がん治療を開始する前にすべての患者に提供する必要がある。治療前の情報提供と実際の外観が変化した時点でのケアの両方が重要であり、様々な職種による集学的アプローチを通して対処されるべきである。

【研究成果】

論文投稿中である

3. 本研究と関連した今後の研究計画

外見変化に関する治療前または治療中の情報提供等により、患者アウトカムが改善するかについての介入研究を検討している。

4. 成果の発表等

発表機関名	種類 (著書・雑誌・口頭)	発表年月日(予定を含む)
MASCC/ISOO 2019	ポスター	2019年6月21日—23日
乳癌学会	ポスター	2019年7月12日